

※文字の大きさは Meiryu UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、(写真1) (表1) などと文中に記載し、右ページに(写真1) (表1) などと表記の上、貼り付けてください。
 ※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
 ※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

※事務局記入欄

【様式 2】

No. A-16

部門名： 1.カリキュラム・マネジメント実践部門	エントリー名： 善通寺市立西中学校 小林理昭 平成30年度 教職員等中央研修 第1回校長研修
活動名： 教師の意識改革で学力向上 ユニバーサルデザインの視点から	
解決すべき課題： ○ 学校の状況が安定し、落ち着いた環境で授業が行われているにもかかわらず、学力が非常に低い。 ○ 全国学力・学習状況調査(3年生)、県学習状況調査(1,2年生)ともに、上位層が著しく少なく、下位層が著しく多い傾向にあり、数値的にも全国平均、県平均から大幅に劣っている。 □ 以上のことから、地域に対する責任を果たすため、「 学力向上 」を学校としての最重点課題と定めた。	
目標・方針： 1 中央研修の報告用プレゼンテーション(図1)を用い、フェーズド・プランニングの手法で全職員が、低学力の原因についての調査、分析を行った。できる限り、客観的なデータにしたがって行うことを共通理解した。 2 教科ごとの得点分布を更に詳しく調べたところ、下位層が全国、県の平均並みなら、平均点は、ほぼ同じになることが分かった(グラフ1)。つまり、下位層の生徒にターゲットを絞った対策が最も効果的だと確認した。 3 分析の過程で、下位層の生徒は「単に意欲に欠けていたり、学習習慣が身につけていないだけでなく、軽度発達障害や学習障害がある、いわゆるグレーゾーンの生徒が多く、我々の授業がそれに対応できていないのではないか」との仮説が提示された。そのため、以下の2点を目標として設定した。 (1) 生徒を追い込んで結果を出すのではなく、まず自分の授業を変えることで生徒を変えていく。 (2) その際、あらゆる生徒に対応できるユニバーサルデザインの視点に立った授業改善を行う。	

活動内容：

1 自己の授業に対する客観的把握
 教師が一方向的にしゃべるだけの授業は、特に下位層の生徒にとっては、「苦しい」授業である。しかし、中学教師はどうしてもしゃべりがちである。そのため、1時間の授業を録音してもらい、自分がどれだけしゃべっているかをストップウォッチで計測してもらった(表1)。右は一例である。中学校教師がいかにしゃべっているかが分かる。

2 視点生徒の選定と達成率の確認
 職員に、中央研修の報告用プレゼンテーション(図2)を示し、各教科、各学級で重点的に着目していく「視点生徒」を選定した。選定の基準は学力不振だけでなく、意欲の欠如や行動の特異性等も含めて検討した。選定された視点生徒は、定期テストや授業ごとに、達成率を数値として残していくことになる。特に「指示が理解できているか」等の基礎的な事項について、視点生徒の達成率が悪ければ、指示そのものが不適切であることが明確となる。

3 視点生徒と Hyper-QU 結果の相関関係理解
 本校は全校生徒に対して、年2回、学級満足度と活動意欲を尺度とした Hyper-QU を行っている。各教科の視点生徒の集計表に Hyper-QU の結果を重ねることで、学力だけでなく生徒一人一人の問題点が明確になってきた(表2)。

学力不振と学級生活の不満が密接に結びついていると想定される生徒や、学習面が克服できれば大きく活躍できると思われる生徒など、個別の対応の根拠となるデータがそろい始めている。

4 ユニバーサルデザインの視点に基づく授業改善と研修
 「具体的に授業を変える」ことをテーマに授業改善を行った。
 キーワードは「教師がしゃべらない」「スモールステップ」「視覚化」「身体性の活用」等である。その文脈の中で ICT 機器の活用も増えてきた(写真1)。夏休みには、1学期の実践を元に、全職員が各自の授業改善についてのレポートを提出し、冊子としてまとめ、情報を共有した。
 ただ、ユニバーサルデザインの視点からの授業改善は、まだ緒に就いたばかりである。そのため、香川県教育センターの特別支援教育担当者や、香川大学等の専門家に継続的に指導を受けている(写真2)。

活動の成果：

- 1 これまでは、中学校での学力向上と言えば、「どのように教え込んで得点を取らせるか」であった。しかし、「まず自分の授業を変えることによって生徒を変えていく」という教師の意識改革が進んできた。
- 2 教師が授業中の自分の発言や行動について、その意味と生徒に与える影響を意識するようになった。

アピールポイント(アイデアや工夫)：

- 1 中央研修の報告用プレゼンテーションを使うことで、最新の情報を校内の全教員で共有できた。
- 2 客観的な数値データの提出を求めることで、教師の授業中の言動が大きく変化した。
- 3 専門的な見識を持った指導者から助言を得ることで、自らの授業を客観的に見直せるようになった。
- 4 学校全体で「ユニバーサルデザイン」を推進することにより、教科間の垣根が低くなり、交流が活発になった。

図1 研修報告用プレゼンテーション1

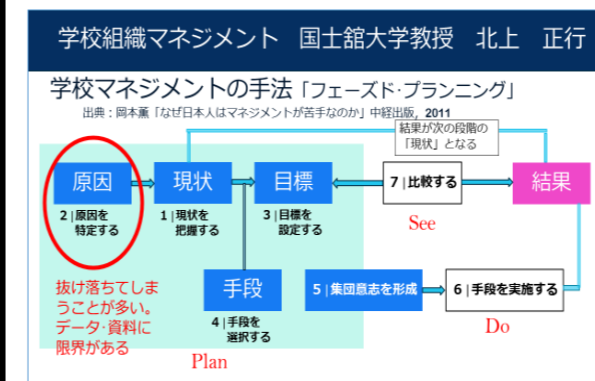


図2 研修報告用プレゼンテーション2

学校ビジョンの構築とリーダーシップ 早稲田大学教授 河村 茂雄

2) D(Do)の段階 「全部全力で」は論外
 ・取り組むべき内容を具体的に指示
 「全ての児童生徒が分かる授業をしよう」ではだめ
 「学力定着率の中間層よりやや下の生徒たちの学習意欲が低いので、~のような働きかけを毎時間間指導で行う」を明確に提示する(プラスの言葉で)
 ○Aは必ず実施する、Bは努力目標など、学校の人的資源の実態を踏まえて優先順位を示す。

グラフ1 度数分布グラフ

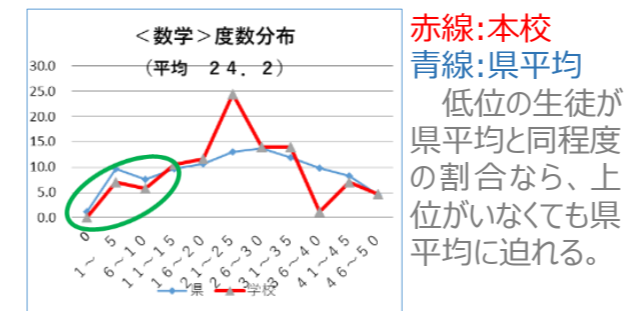


表1 1時間の授業で何分しゃべっているか

教科	教師のしゃべり	生徒の思考	生徒間の対話
英語	3分7秒	7分12秒	10分41秒
社会A	3分14秒	-	4分24秒
社会B	3分29秒	7分43秒	5分10秒
理科	1分15秒	10分00秒	約3分

表2 視点生徒と Hyper-QU 結果の相関関係

Hyper-QU のデータ

視点生徒及び主な留意点						Hyper-QU のデータ									
No.	氏名	国	社	数	理	英	QU	No.	氏名	国	社	数	理	英	QU
1		○	○	○	○	○	孤立	1		○	○	○	○	○	
2								2							
3								3							
4		○	○	○	○	○	意欲	4		○	○	○	○	○	
5								5							
6								6							
7								7							
8								8							不満
9		○	○	○	○	○		9							
10		○	○	○	○	○	意欲	10		○	○	○	○	○	支援
11								11		○	○	○	○	○	注意
12								12							
13		○	○	○	○	○	不満	13							
14		○	○	○	○	○	不満	14							孤立

写真1 ICT 機器の活用



写真2 専門家からの研修

